若者よ、勉強しよう

「週末寸言」　050618

一日に2時間以上も音楽を聴くのを日課にしてきた。これが、数十年来の習慣だから、トータル2年の余も飲まず食わず、ステレオの前に座っていた勘定になる。今となっては遅きに失したが、この時間をもっと実用に向けていたら、もう少し豊かな老後が待っていたのかも知れない。

この種の音楽ファンにとって、人間ドックの聴力検査で「高い周波数領域で数十デシベル聴力が下がっていますよ」などと言われることほど不愉快なことは無い。聴力、分けても5千ヘルツ以上の高周波域のそれは、音像をとらえることや、音の出場所を同定する定位感のために絶対必要な能力だ。だから、それが劣化していますと言われるのは死ぬほど辛い。

ところがこういう人間ドックのご託宣とは無縁に、音楽を聴いていて高域が不足しているとか、音像がぼやけたり、定位感が無いなどと、本人は全く感じてはいない。今も、若かった頃の音域を十分に聴取し、感動しているのだ。

30歳で難聴になり、生涯の殆どを聴覚障害者として過ごした楽聖ベートーベン。他にもチェコのスメタナやイギリスのディーリアスなど大作曲家で難聴は少なくない。全身を使って肉体的にも健康になるのか、マエストロと呼ばれる指揮者たちには実に高齢者が多い。トスカニーニ90歳、ワルター87歳、ベーム88歳、カラヤン82歳。

だが、これら大音楽家達が人間ドックの聴力検査でよい成績を上げていたとは聞いていない。彼らは、若い時からの研鑽で、耳ではなく心で楽音を聴き分けていたに違いない。

山や谷の凹凸を等高線データとしてコンピュータで扱えるようにした地図を三次元地図という。これに東西南北の当てずれか一方向から太陽光を当てて山の斜面の一方を明るく、その反対斜面を暗く表示することで、画像を立体的に見せることができる。この時、ある一方向から照射した画像では正しい立体感が得られるのに、それと反対方向からでは凹凸が逆にしかはどうしても理解できていないため見えない。これは、二次元画像から三次元立体として理解する訓練ができていないらしい。

旧陸軍の図上演習中に、傍らにあった花瓶が横転して、作戦地図の上に水がこぼれた。そのとき指揮官が「あっ、水が流れない！」と叫んだという話を大学初年級の図学の時間に教えられた。「二次元画像から立体的に認識できるのは、長い努力の賜物。諸君も技術者としてしっかり訓練しなくてはいけない」という教訓付きだったが。

若い時からの学習と訓練だけが、加齢によって失われる能力を補ってくれる。だから、若者よ、今すぐ勉強しよう。